

まえがき

英語の教職科目で必要ということもあって、英文科がある大学では英語学概論の授業が行われている。従来、ほとんどの場合、英語という言語の輪郭をまずつかむための授業となっていて、様々な教科書が出版されている。今更新しい教科書をつくる必要性はないように思われるかもしれない。言語学および英語学の研究において、母語話者としての直感が重視されるようになって久しいが、不思議なことに、母語話者としての直感がきく日本語の分析を土台として英語の分析へ進むという、日本語と英語の対照を基本とした教科書は、今まで存在しなかった。そこで、日本語と英語を対照することによって、どのような利点があるかを考えてみよう。

まず第一にあげられるのが、母語である日本語については微妙な言語直観を働かせることができるということがあげられる。日本で英語学を勉強した人が英米に留学すると、レポートや論文のテーマとして日本語に関するものを選ぶことが多い。ひとつには、英語を題材にすると、非常に微妙な文法性の判断が必要であることが、最近の理論の発展によって多くなっているということがあげられる。そこで、細かいところまで直感のきく日本語を対象言語として選ぶことになるのである。それまでに日本語についての概略をつかんでいない場合、少々努力が必要になる。このような状況がもうかなり長い間続いているが、日本の大学におけるなわばり意識のせいか、英文科で日本語のことを題材にすべきではないという意識がいまだに強いようである。純粹主義に基づいて英語だけを題材にすることに徹すると、どうしても隔靴搔痒の感が免れない。言語研究の楽しさを実感するためには、無意識下にある言語直感を掘り出すことによって、隠れていたものを発見をすることが大きな役割を果たす。その意味で、表面的には見えないものを探り出すために、母語を透徹した形でじっくりと注意深く観察しなければならない。

第二に、英語と日本語は多くの面で対立的なので、言語のタイプを知るのにはこの2つの言語から出発するのが手っ取り早い。もちろん、世界には日本語とも英語とも異なるタイプの言語があるから、言語類型論の概観の中で英語と日本語の占める位置を確認する必要がある。単に日本語と英語の輪郭を知るだけでなく、日本語と英語はどのようなタイプの言語であるかということを確認する

べきである。また、本書では他の言語についてはふれないが、できれば多くの英語や日本語と異なるタイプの言語に触れることによって、幅広い立場から現象をみる目を養うことが望ましい。

本書の執筆陣は、大半が関西言語学会の中心メンバーである。執筆者および編者が学生時代に大阪外国語大学大学院の林栄一教授と寺村秀夫教授による共同ゼミにおいて育まれた、日英対照の基本的態度が本書のバックボーンとなっているといっても過言ではない。黄金時代といわれたその当時の知的興奮を、少しでも今の学生諸君に感じていただければ幸いである。

本書は日英語対照研究シリーズを母体として企画されたもので、学部学生が日本語と英語について学ぶなかで、言語研究の方法を身に付けることをねらいとしている。本書で日英語対照研究に対する興味を持った諸君は、ぜひ本格的な研究書のシリーズである日英語対照研究シリーズを読んでみられることをおすすめる。また、本書と研究シリーズとの間に中間的なものが必要な場合のために、新たにセミナーシリーズが企画されているので、英語学特殊講義や英語学演習などの英語学概論を既習済みの学生のための授業、あるいは学生諸君の自習のために用いることができるであろう。

本書の企画段階においては、神戸大学文学部の同僚である柴谷方良教授と共同で作業が行われた。ところが編集段階になって、柴谷教授はUCLAの客員教授として1年あまり海外ですごされることとなり、編集の任は西光、およびくろしお出版の沢田博美氏が専らあたることとなった。その間、原稿を早く出していただいた著者の方々には1年間予定を遅らせた出版となったので、多大なご迷惑をおかけすることとなってしまった。ようやくこのたび出版の運びになったことは大きな喜びである。当初は西光と柴谷教授の共同編集で企画されたのであるが、柴谷教授は編集には直接あたらなかったもので、編集者からご自分の名前をはずして欲しいとのたつてのご希望で、西光一人の編集という形になった。しかしながら、企画段階での柴谷教授のご助言はいろいろの形で生かされているものと信ずる。本書の改訂版が出版されるときには、柴谷教授に編集および執筆に積極的にご参加いただけることを願っている。

1997年 春 西光義弘

目次

まえがき	i
執筆者一覧	x
第1章 音声学・音韻論	1
はじめに	2
1.1 発話のメカニズム	2
1.1.1 発声と調音	2
1.1.2 母音の記述様式	3
1.1.3 子音の記述様式	5
設問 1	8
1.2 音素と異音	9
1.2.1 定義	9
1.2.2 ミニマルペアと相補分布	10
1.2.3 母音体系	12
1.2.4 子音体系	14
設問 2	15
1.3 音節	16
1.3.1 定義と役割	16
1.3.2 モーラと音節	18
1.3.3 子音結合と音節構造	20
1.3.4 母音と子音の結合度	23
設問 3	25
1.4 語アクセント	25
1.4.1 定義と役割	25
1.4.2 ピッチアクセントとストレスアクセント	29
1.4.3 複合語アクセント	31
1.4.4 文強勢	34
設問 4	36
1.5 イントネーションとリズム	37
1.5.1 語ピッチ言語とイントネーション言語	37
1.5.2 音節拍リズムと強勢拍リズム	39
1.6 まとめ	42
設問 5	43
Further Reading	44

第2章 形態論とレキシコン	47
2.1 形態論の仕事	48
2.2 語の特徴	51
2.2.1 音声的なまとまり	51
設問 1	53
2.2.2 名付け機能と意味の慣習化	53
設問 2	54
2.2.3 生産性と語彙的制限	54
設問 3	58
2.2.4 統語的な要素の排除	58
設問 4	59
2.3 形態素分析	59
2.4 語形成過程の種類	63
2.4.1 偶発的な語形成	63
新造語	64
借用	64
固有名詞の普通名詞化	65
設問 5	65
設問 6	65
2.4.2 少し規則的な語形成	66
逆形成	66
短縮	67
頭文字語	68
混成	70
設問 7	70
2.4.3 規則性の高い語形成	71
複合	71
設問 8	74
設問 9	75
設問 10	77
設問 11	79
設問 12	83
設問 13	83
派生	83
設問 14	85
設問 15	86
設問 16	87

設問 17	87
設問 18	90
転換	90
設問 19	91
設問 20	94
Further Reading	95
第3章 統語論 生成文法	97
3.1 句構造	98
3.1.1 ことばの構造	98
3.1.2 日英語の語順	98
3.1.3 構成素	100
3.1.4 主要部	102
3.1.5 動詞句の階層構造	103
3.1.6 X' 型式	106
3.1.7 「文」の扱い	107
3.1.8 従属節の扱い	109
設問 1	111
3.2 格と意味役割	112
3.2.1 抽象格	112
3.2.2 格フィルター	115
3.2.3 英語の不定詞節	117
3.2.4 PRO	118
3.2.5 日本語の主格付与	120
3.2.6 ゼロ代名詞	121
3.2.7 意味役割	121
設問 2	123
3.3 移動	123
3.3.1 表示のレベル	123
3.3.2 WH 移動	125
3.3.3 島の制約	126
3.3.4 下接条件	127
3.3.5 繰り上げ構文	129
3.3.6 受動文の派生	130
3.3.7 移動のタイプ	132
3.3.8 生成文法の基本的発想法	133
設問 3	134

Further Reading	134
第4章 統語論 機能主義	137
4.1 はじめに	138
4.2 文の情報構造	139
4.2.1 主題と題述	139
4.2.2 主題、対照、総記、中立叙述	140
4.2.3 新情報と旧情報	142
4.2.4 焦点	145
4.2.5 焦点位置と移動	146
設問 1	149
4.3 関係節	151
4.4 代名詞照応	155
4.5 省略	160
設問 2	164
4.6 視点	166
4.7 数量詞の作用域	173
4.8 結び	178
設問 3	180
Further Reading	181
第5章 意味論	185
5.1 分野と立場	186
5.2 さまざまな意味関係	190
5.2.1 多義性(ambiguity)	190
5.2.2 同義性(synonymy)	192
5.2.3 能動文と受動文(active and passive)	192
5.2.4 前提(presupposition)	194
5.2.5 語の意味情報	196
設問 1	199
5.3 形式意味論のアプローチ	201
5.3.1 文と命題	201
5.3.2 命題論理	202
設問 2	208
5.3.3 形式意味論的アプローチの特徴	208
5.3.3.1 文の意味	208
5.3.3.2 モデル	212

5.3.3.3	形式意味論から見た命題論理	215
	設問 3	217
5.4	認知意味論のアプローチ	218
5.4.1	認知的ということ	218
5.4.2	メタファー理論	222
5.4.2.1	背景	222
5.4.2.2	文字通りの意味とメタファー	224
5.4.2.3	概念領域の多様性	225
5.4.2.4	語の多義性とメタファー	226
5.4.2.5	推論とメタファー	229
5.4.2.6	複数のメタファーによるターゲットの理解	232
5.4.2.7	意味論の在り方	235
	設問 4	238
	Further Reading	240
第6章	語用論	243
	はじめに	244
6.1	文脈における言語の使用	244
6.1.1	プロソディ依存型の英語とセグメント依存型の日本語	246
6.1.2	複数の派生的意味	246
	設問 1	247
6.1.3	談話の流れ	249
6.1.4	文のかたちと機能のずれ	251
	設問 2	251
6.1.5	派生的意味の慣用化の度合	251
	設問 3	253
6.2	グライスの会話の協調原則	253
	設問 4	256
	設問 5	256
	設問 6	256
	設問 7	256
6.2.1	日英語間のずらす程度の違い	257
6.2.2	談話の流れと間接発話行為	258
	設問 8	258
6.3	ポライトネス	258
6.3.1	直接依頼回避の方策	259
6.3.2	日英語の同義表現の意味合いの違い	260

6.4	発話行為	261
	設問 9	262
6.4.1	遂行文の文法的制約	262
6.4.2	3種の発話行為	263
	設問 10	263
6.4.3	発話行為の条件	263
	設問 11	264
6.5	間接発話行為	264
6.5.1	間接発話行為における日英語の違い	266
6.5.2	文文化の問題	269
6.5.3	日本語の間接発話行為	269
6.6	命令文・依頼表現の日英語対照	271
6.6.1	日英語の命令文	271
6.6.2	依頼表現の日英対照	272
	6.6.2.1 Will you	273
	6.6.2.2 命令文, will you?	275
	6.6.2.3 Can you	276
	6.6.2.4 Will youとCan youに関するアンケート調査	277
6.6.3	Will youとcan youの押し付けの度合の違いはどこからくるのか	278
6.6.4	自己中心型の英語と相手中心型の日本語	279
6.7	日本語の謙遜志向と英語の自己主張志向	282
	Further Reading	283
第7章 英語史・補説 日本語史		287
7.1	英語以前	288
7.1.1	インド・ヨーロッパ語の発見	288
7.1.2	対応の発見と再建	288
7.1.3	インド・ヨーロッパ語族	289
7.1.4	グリムの法則	291
7.1.5	内面史と外面史	292
7.1.6	外面史概観(1)	292
	設問 1	292
7.2	古英語	293
7.2.1	英語史の時代区分	293
7.2.2	外面史概観(2)	294
7.2.3	古英語の文献	297
7.2.4	古英語の音韻論	299

7.2.5	古英語の形態論	300
7.2.6	古英語の統語論	303
7.2.7	古英語の語彙	305
	設問 2	307
7.3	中英語	309
7.3.1	外面史概観(3)	310
7.3.2	中英語の文献	313
7.3.3	中英語の音韻論	316
7.3.4	中英語の形態論	318
7.3.5	中英語の統語論	320
7.3.6	中英語の語彙	323
	設問 3	324
7.4	近代英語	325
7.4.1	外面史概観(4) - 1500 - 1650年	325
7.4.2	外面史概観(5) - 1650 - 1800年	328
7.4.3	近代英語の音韻論	330
7.4.4	近代英語の形態論	332
7.4.5	近代英語の統語論	334
7.4.6	近代英語の語彙	341
	設問 4	344
7.5	世界の英語	344
7.5.1	アメリカ英語	345
7.5.2	黒人英語	354
7.5.3	オーストラリア英語	356
	設問 5	358
付録	語形変化表	359
Further Reading		363
補説	日本語史	366
	1 日本語以前	366
	2 外面史概観	368
	2.1 時代区分	368
	2.2 上代	368
	2.3 平安時代	369
	2.4 鎌倉・室町時代	372
	2.5 江戸時代	376
	2.6 近代	379
	設問 1	381

3 内面史概観	381
3.1 語彙	381
3.2 音声・音韻と表記	387
3.3 形態論	391
3.4 統語論	398
設問 2	401
Further Reading	401
索引	403

執筆者一覧

第1章 音声学・音韻論

窪蘭晴夫（人間文化研究機構・国立国語研究所教授）

第2章 形態論とレキシコン

影山太郎（国立国語研究所名誉教授）

第3章 統語論 生成文法

三原健一（大阪大学名誉教授・京都ノートルダム女子大学客員教授）

第4章 統語論 機能主義

高見健一（学習院大学文学部教授）

第5章 意味論

杉本孝司（大阪大学名誉教授）

第6章 語用論

西光義弘（神戸大学名誉教授）

第7章 英語史

西村秀夫（三重大学教育学部教授）

補説 日本語史

金水 敏（大阪大学大学院文学研究科教授）

第1章 音声学・音韻論

窪菌晴夫

1.1 発話のメカニズム

はじめに

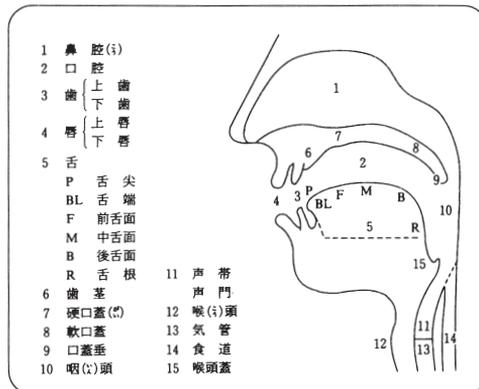
日本語と英語は、耳で聞いただけではほとんど共通性のない言語のように聞こえる。日本人(日本語話者)が英語を英語らしく話すことができず、また英語話者の日本語が日本語らしく聞こえないというのは、このような相違点に起因するのであろうが、視点を少し変えて「言語の構造」というやや抽象的な観点から日本語と英語を比較すると、両者はどのような点で異なり、またその差異はどのくらい大きなものであろうか。本章では、日英語を他の言語と比較・対照することにより、両言語の体系上の相違点と共通点を明らかにしてみたい。本章は音声分析の基礎を論じた前半(1.1～1.2節)と、日英語の韻律構造(プロソディー prosody)を比較した後半(1.3～1.5節)から構成されている。前半では、音声学と音韻論の基本的概念を解説しながら、分節素 segment —— 一つ一つの「音」—— のレベルでの日英語の共通点と相違点を比較し、後半では、音節・語アクセント・リズムといった韻律特徴に焦点をあてて、類型論的立場から日英語がどのように分類されているか解説する。

1.1 発話のメカニズム

1.1.1 発声と調音

人間は、特別な障害がない限り、自然に口から音声を産出する。この過程は、空気の流れを作り出す「肺」から、空気が出ていく「口・鼻」までの複数の器官による複数の機能に分解できる。この中で特に重要なものが、喉頭(つまり)

[図1] 発音器官 (Organs of Speech)



第2章 形態論とレキシコン

影山太郎

2.1 形態論の仕事

英語にも日本語にもいろいろなくことば遊び>がある。日本で最もポピュラーなのはしりとりだろう。「夜明け」-「毛糸」-「トンネル」……のように続いていくわけだが、この簡単な遊びを見ただけでも我々が母語について様々な言語学的知識を蓄えていることが分かる。言語学的知識の第一は音声に関するものである。しりとりは前の人が言ったことばの最後のモーラ(mora)を問題にし、「夜明け」なら /ake/ や /e/ ではなく /ke/ の部分を承ける。その最後のモーラが「ん」ではいけないという条件も、日本語では先頭に「ん」が来る単語がないという音韻論の知識に依拠している。また、「夜明け」を承けて「消す」(動詞)とか「煙たい」(形容詞)と言うと負けになるが、これは、名詞かどうかという品詞に関する知識に依っている。名詞の中で動物名や職業名のように範囲を限定することも多いが、これは意味論の知識があることの証である。母語話者なら、名詞について更に複雑な判断を下す能力さえ備えている。例えば、「トンネル」に対して「トンネル堀り」、「トンネル堀り会社」のような表現はどうだろうか。これらは長いけれど、なんとか許されるだろう。特に最後の「トンネル堀り会社」というのは辞書にも載っていない表現だが、日本語話者なら複合語であると判断することができる。これに対して、意味は似ていても「トンネルを掘る会社」と言えば、その人は負けになってしまう。なぜなら、これはもはや複合語ではなく、名詞句になるからである。

我々が無意識のうちに身につけている母語に関する様々な言語学的知識のうち、語彙に関係するものは文法体系の中のレキシコン (lexicon) と呼ばれる部門に蓄えられている。レキシコンは辞書 (dictionary) とも呼ばれるが、これは日常用いる国語辞書や英和辞書ではなく、母語話者が頭脳の中に持っていると考えられる心的な辞書 (mental lexicon) を指している。

レキシコンの役目は、名詞、動詞、形容詞、副詞、前置詞、助動詞など、当該言

第3章 統語論 生成文法

三原健一

3.1 句構造

3.1.1 ことばの構造

人間は毎日ことばを使って暮らしている。誰にも会わずに一日を過ごす日があったとしても、独り言さえ言わずに暮らす日は、おそらくあり得ないだろう。そのように日常的なことばに対して、私たちは、ふだん規則性とか構造といったことを意識することはあまりない。しかし例えば、次の文章を細かく区切りながら読めと言われたら、深く考えなくても、|| で示された箇所に休止を置くことができる。

- (1) 私の父は || 戦前 || ブラジルに渡り || そこで || 事業を起こして成功し ||
ブラジル人の母と結婚して || 生涯 || 幸せに暮らしました。

さらに細かく区切るとすると、「ブラジル人の母と || 結婚して」などとすることはできるが、「ブラジル人の || 母と結婚して」は幾分不自然に感じる。後者が不自然だと感じるのは、「ブラジル人の母(と)」が一まとまりになっているという、私たちの直感があるからであろう。どのような区切りが自然か判断できるということは、私たちがことばの構造を、たとえそれが無意識にであったとしても、知っているということである。

統語論(syntax)とは、語と語の結び付きにおける規則性を、文の構造という観点から明らかにしようとする、言語学の一分野である。**生成文法**における統語論は特に、日本語や英語などという個別言語の違いを超えて、多くの言語に共通する点を捉えようとする方向性を持っている。もちろん、日本語と英語は系統が異なる言語なので相違点も多いが、異なる点をただ異なるとするのではなく、その奥に潜む原則を発見し、その原則が規則的な違いとして現われると考えるのである。次節以下で、そのような原則の一つが引き起こす、日英語の規則的な違いを見ることにしよう。

3.1.2 日英語の語順

英語が、**インド・ヨーロッパ語族**の西ゲルマン語派に属する言語であるこ

第4章 統語論 機能主義

高見健一

4.1 はじめに

言語の構文分析を行なう際、おおまかに言って、次のような2つの立場が存在する。ひとつは、それぞれの構文が持つ諸特性を、その文の構造や文法に内在する原理、原則に基づいて説明しようとする立場である。このような立場は**形式主義 (Formalism)**と呼ばれる。形式主義は、文法、つまり統語論を中心に据え、統語論を言語の意味やその使用に係わる意味論、語用論とは独立した部門として捉える。そして、言語の規則性や普遍性は、文法規則のみによって捉えられると考える**自律的統語論 (autonomous syntax)**の立場を取っている。3章で概観した生成(変形)文法のGB理論は、このような立場に属する文法理論のひとつである。このような形式主義に対し、もうひとつの立場は、それぞれの構文が持つ諸特性を言語使用の側面から捉え、言語の意味や機能、人間の認知や知覚など、文法に外的な要因に基づいて説明しようとする立場である。このような立場は**機能主義 (Functionalism)**と呼ばれ、言語の統語構造やその諸特性が、言語使用に係わる様々な概念と相互に関連しあい、前者は後者の反映として捉えられると考えている。

形式主義は、私達人間が言語に対して持っている言語能力を形式的体系として明示しようとする立場である。それに対し機能主義は、私達人間が言語を社会でどのように使用しているかという、言語使用の側面を解明しようとし、話し手と聞き手の間で何が、どのような状況で、どのように伝達されるかを明示しようとする立場である。形式主義は、言語を人間の心理現象として捉え、言語は文の集合であり、その主たる働きは思想の表現であると考えてのに対し、機能主義は、言語を人間の社会現象として捉え、言語は、人間が社会的活動を行なうための道具であり、その主たる働きは情報の伝達であると考えてる。

形式主義と機能主義は、このように、言語に対する考え方や方法論が異なるが、これらの立場は言語研究の両極端と考えてよく、実際の様々な言語分析を

第5章 意味論

杉本孝司

5.1 分野と立場

言語記述の諸分野は、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論の五つの分野に分けられることが多い。それらの記述対象範囲をおおまかに示せば次のようになる。

音韻論	——→	音声
形態論	——→	語の形
統語論	——→	文の形
意味論	——→	語や文が表す内容
語用論	——→	語や文の用い方

この内最初の三つは形式に深く関わり、残りの二つが意味に深く関わる分野である、と覚えておけば、これら五つの分野への分類根拠をある程度理解したことになる。もちろんこのような截然とした分類をもって言語記述の各分野があたかもそれぞれお互い独立無関係の分野であるかのような印象を持ってしまうことはよくない。それぞれが完全に独立している、とする立場もないとは言えないが、現実には言語記述においてそれぞれの分野が複雑に絡み合い、連携し合う、ということも頻繁であるし、また、分野自体の境界など存在しないと考えた方が無理のない説明や記述が可能な場合もしばしばある。しかし、出発点においては、意味論の言語記述におけるある程度の位置付けを理解する、という限りにおいて、このような分類と記述対象を意識しておくこともあながち無意味とは言えないであろう。

意味論の記述対象範囲が「語や文が表す内容」であるとして、我々は一体「意味」というものをどのように考えていけばよいのであろうか？このことに対する万人が納得する答は残念ながら今のところない、とするのが正しい評価だと思う。しかしそのような状況の中でも現在大きく二つの流れが存在することも疑いようのない事実である。本章の目的はこれら二つの流れを組む意味論を素描することにあるが、ここでは語の意味関係に注目することによってそれら二つの

第6章 語用論

西光義弘

6.1 文脈における言語の使用

はじめに

今までの章で勉強してきた音声学、音韻論、形態論、統語論は基本的に記号としての言語のかたちと意味の二側面のうち、かたちの面を解明する分野であった。言語の意味の側面を研究するのが意味論と語用論である。意味論では文自体が文脈と関係なくもっている意味を研究対象とする。ところが文脈においてはかならずしも文字どおりの意味とは違う意味で用いられることもある。語用論は言語の構造が現実のコミュニケーションにおいて用いられるときにどのような現象が起こるかを検討し、一般原則を求める。

6.1 文脈における言語の使用

次の対話において、Bのthank youは文字どおりの「ありがとう」という意味ではなくて、「余計なお世話だ。」あるいは「ほおっておいてくれ。」とでも訳すべき意味で用いられている。

(1) A: I'm only looking out for your own good.

B: I can look out for my own good myself, thank you.

Aの発言はAとしては「親切心で心配してあげているだけである。」ということを行っているのであるが、その裏には「おまえは自分の尻のハエも追えない人間だ。」ということが潜んでいると思われる。Bの反応はその潜んでいる意味(つまり文字どおりの意味literal meaningでは出てこない意味)に敏感に反応したのである。したがってAはBの反応は言いがかりであるときりかえすこともできる。Bが単にThank you. とだけ言ったのであれば「ありがとう。」という意味になりやすい。(もちろんその場合にも怒ったような口調で言えば「余計なお世話だ。」という意味になる。)しかし直前に「自分のことは自分です。」と言っているので「大きなお世話だ。」という意味になる。このThank youの用法は辞書にも記載されている。Collins COBUILDの第2版のthank youの項の4

第7章 英語史

西村秀夫

補説 日本語史

金水 敏

7.1 英語以前

英語の歴史は、449年、大陸からブリテン島に侵入したゲルマン民族(アングル人、サクソン人、ジュート人)の言語に始まる。1500年を超える英語の歴史について考える前に、われわれはゲルマン民族がもたらした言語がどのようなものであったかを見ておく必要がある。

7.1.1 インド・ヨーロッパ語の発見

1786年、カルカッタ駐在のイギリス人判事ウィリアム・ジョーンズ(William Jones 1746-94)は「インド人について」という講演を行ない、その中で、古代インドのサンスクリット語(梵語)と、ギリシア語やラテン語との間に驚くべき類似が見られることを指摘し、これら三つの言語が、今では失われた「共通の祖先」から生じた可能性を示唆した。さらにジョーンズは、ゴート語やケルト語、さらに古代ペルシャ語もこの「共通の祖先」から生じたものと考えた。ジョーンズ自身は「共通の祖先」がどのようなものであったかについて述べることはなかったが、ジョーンズのこの講演は19世紀のドイツにおける比較言語学の発達の契機となり、東は中央アジア(トルキスタン)やインドから西はアイスランドに至るまでの広大な範囲に分布する**インド・ヨーロッパ語族**(印欧語族)(Indo-European Family)の存在が明らかになった。

7.1.2 対応の発見と再建

19世紀の比較言語学者たちは、諸言語における基礎語彙(数詞、身体部分の名称、親族呼称など)を詳細に調査し、音韻に偶然とは考え難いほどに規則的な**対応**(correspondence)が見られる場合、それらの言語は親族関係にあり、同一の**語族**(language family)に属すると判断した。以下に、対応の例をいくつか挙げておく。